

令和2年度 印西市民アカデミーだより 第3号

印西市の将門伝承

一平将門は、平安時代中期の関東の豪族で平氏の姓を受けられた高望王の三男平良将の子。下総国、常陸国に広がった平氏一族の抗争から、関東諸国を巻き込む争いと進み、京都の朱雀天皇に対抗して「新皇」を自称し、東国の独立を標榜したことにより朝敵となる。しかし、即位後わずか2か月足らずで藤原秀郷、平貞盛らによって討伐される。(承平天慶の乱) 死後は、築土神社、神田明神、国王神社などに祀られる。

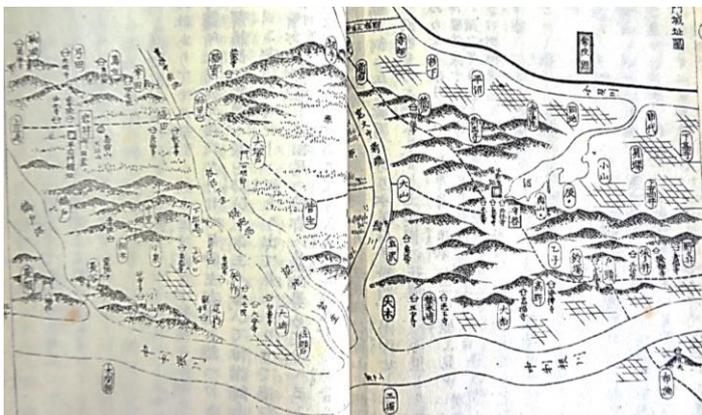


大和櫻に描かれた平将門

その平将門の出城跡と伝えられる「竹袋城址」が印西市の竹袋地区にあります。昔からこの周辺の住民は城山と呼んでいました。赤松宗旦著「利根川図誌」によると「城の大きさは、およそ東方から南へ 15,6丁(約 1,700m)、横は2町ないし3町(約 300m)くらいあり井戸は城から東のほうにある。前は大河谷原、西には手賀浦、後ろは谷と山つづきである。」という記述があります。これを現在に地形とあわせても合致することから当時の様子をうかがうことができます。この記述にある井戸は、「将門の井戸」と呼ばれ、平将門伝承の一つとして語り継がれています。さらに、平将門の愛妾だった小宰相(桔梗の前)に関する伝説も残っており、木下の山根山不動尊には「娘小宰相之霊」と刻まれた供養塔(右写真)があります。



「印西市民アカデミーだより+第2号」で紹介した利根川図志に「平新皇将門城址図」(左下)という絵図が掲載されており、現代の地図と比べても遜色ないものである。本城のあった



岩井(茨城県坂東市)から前線基地があった守谷城(茨城県守谷市)にかけては河川や湖沼が網の目のように広がり一帯が天然の要塞のようになっていたことが分かります。

成田山新勝寺は、平将門を調伏するため、朱雀天皇の密勅を受けた寛朝僧正が京の高雄山神護寺の空海作の不動明王像を奉じて東国に下り、下総国公津ヶ原で不動護摩の儀式を行ったのを開山起源に持つ。